

## 私の留学体験記

広島県立高陽東高等学校 2年 松原 綺心（まつばら あやか）

留学期間 令和6年3月2日～令和6年3月15日（14日間）

留学先 Tauraroa Area School（ファンガレイ、ニュージーランド）

私は今回の留学で、普段どれほど端折った日本語を使っていたかを実感しました。

私は英語が得意というわけではなく、どちらかと言えば苦手で、不得意な教科です。その為、英語の文章を考えるときに日本語で文章を作り、そこからさらにその文に合った英語を探すところから始めていました。しかしこの方法は授業やテストなどの解答するまでにある程度時間に余裕がある場面でないと実用的ではないやり方でした。なぜなら、会話をするときにはそれ程時間に余裕もなく、しかも私は最初に述べたように日本語でならこう返すだろうと考えた文章が、文章というよりも単語の羅列に近く、ほとんどの言葉を端折っていたからです。日本語では数単語で答えていた問いかけでも、英語でも同じはずがないからです。しかし私には問いかけに対してすぐにその答えとなる文章を作り出せるほどの英語力はなく、英語の語彙力もない為、すごく簡単な文章に伝えたい単語を入れ、文法も、時制も出鱈目な英語で返答することしかできませんでした。

しかし今回の留学経験のおかげで、自分が普段使っている日本語を見直すことができました。まず一番驚いたのは、主語を使う習慣がついていないことです。私は、という主語だけでなく、友達が、あの人が、その物が、という二人称ですら使うことをしていなかったのです。その他にも、可愛い、カッコいい、凄い、というような単語だけ、何がどうしてそう感じたのかを考えることもなく簡単な感想を抱くことが多いことにも実感しました。簡単な単語だけでは会話をするにはできないということすら理解できていなかったことにも驚きました。日本での普段の会話で如何に言葉を蔑ろにしていたか、聞き手とその場の雰囲気にとどれだけ頼り切った会話をしていたかを思い知らされました。

このように私は、今回の留学経験によって英語よりも普段自分が使っている日本語について考え直させられました。しかしそれは、日本語が全く通じない外国語圏でのホームステイ体験をしたからこそそう考える機会を得た為です。留学には、その土地で使われている言語や文化を学べるだけでなく、母国の言語や文化を考え直すきっかけを得ることができるということを体感できる貴重な経験だと感じました。その為、この体験から得た知識や思考を活かすことができる生き方を今後はしていきたいです。

